

# 第3回 被災地に学ぶ会

「被災地という場をお借りして

人としての生き方を学ぶ会」

## 活動報告



石巻市立鹿妻小学校・鮫ノ浦（牡鹿半島）

2011.9.9－9.11

## 【第3回 被災地に学ぶ会 行程表】

9月9日(金)	18:30	JR尼崎駅 南側バスロータリー 受付					
	19:00	バス発車 → 自己紹介					
	20:30	滋賀県多賀SA(30分休憩) = 滋賀(1名)・三重(7名)合流					
9月10日(土)	8:00	石巻市立鹿妻小学校到着 → 避難所チームミーティング → 活動					
		8:10 牡鹿チームは牡鹿へ出発					
		9:00 牡鹿ボランティアセンターに到着→活動開始					
		14:30 活動終了→ 鹿妻小学校へ移動					
		16:00 鹿妻小学校へ到着					
	16:30	鹿妻小学校を出発 → 大川小学校へ					
	17:00	大川小学校到着					
	18:00	道の駅(上品の湯)入浴+夕食					
	20:00	バス出発(帰路へ) → バス内体験発表					
9月11日(日)	8:00	JR尼崎到着 解散					
<活動内容>							
避難所チーム	家具づくり	パーティションとして使用していた段ボールを家具に。仮設住宅で使っていただく。					
	トイレ掃除	避難所体育館のトイレ掃除					
	校内掃除	校内の溝掃除、草抜き、掃き掃除など					
	お話	避難所で生活されている方々とお話をする					
牡鹿チーム	鮫ノ浦	広大な田園が一面砂浜のように、その瓦礫撤去作業。カキの養殖の復旧作業。					
参加人数							
41							
	性別			職種			
	男性	女性		教師	一般	学生	
	24	17		29	4	8	
	年代別						
	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代
	2	19	9	7	2	1	1

### 第三回「被災地に学ぶ会」体験記

★奈良県40代 女性★

第一回の「被災地に学ぶ会」に引き続き、今回も参加させていただきまして、ありがとうございます。ありがとうございました。

大谷先生をはじめ皆様の色々なご準備、ご手配のうえで、今回も学ばせていただけたことを考えると、ただただ感謝の気持ちでいっぱいです。

「日本を美しくする会」様には、資金面等で多くのご支援をいただき、私のような者も参加させていただけましたことを、心から感謝申し上げます。本当にありがとうございます。

さて、今回は「避難所チーム」の一員として参加させていただきました。私は、この「チーム」という意識が大好きです。前回は、約40人で作業をさせていただき、全員が心ひとつになった「チーム」であることを感じたとき、感激で涙が止まりませんでした。今回は、行きのバスの中から、大谷先生が「チーム」であることを意識するようにおっしゃいましたので、ワクワクしていました。

また、避難所で作業をさせていただく際、できるだけ時間を見つけて、避難所におられる方々と交流を持つようにと、大谷先生はおっしゃいました。私は、それらのことをしっかりと心に刻み、現

地に向かわせていただきました。

避難所に到着すると、代表の浅野さんが私たちの姿を見て、涙を流されました。私はその涙を見て、「自分のできることを精一杯させていたただこう。」と改めて決心しました。

今回、浅野さんにお会いすることも、私の楽しみの一つでした。浅野さんは長い避難所生活をされているうえに、たくさんのお気遣いをされているとお聞きしていましたので、体力的にも精神的にもかなりお疲れだと思うのですが、そんなご様子は一つも見せられずに、ずっとテキパキと動いておられました。私たちにも色々とお気遣いいただき、恐縮しました。自分の時間のほとんどを、他の人々のために使われている浅野さん。まさに利他の精神をお持ちの方です。とても美しい方だと思いました。これから自分がどんなにしんどいときも、浅野さんのことを考えると頑張れます。浅野さんのご苦勞に比べると、私の苦勞なんてちっぽけなものだと思います。

避難所に入ると、早速、段ボールで家具を作る作業をさせていただきました。チームの皆さんが、「今、自分は何をすべきか。」を意識されながら、サツと行動されているのを拝見し、刺激を受けました。大谷先生がお声をかけてくださったので、思い切つて、避難所におられる方に話をさせていただきますに行きました。

そこで出会ったのが佐藤サエ子さんです。お一人で暮らされているとのことで、話し相手がないことが寂しいとおっしゃっていました。被災された娘さんたちのこと、その娘さんたちになかなか職が見つからず大変なことなどをお聞きしました。途中、洋服等を箱に入れ、避難所におられる方々に渡しておられるご婦人が来られました。佐藤さんも何品か受け取られていましたが、それよりも品物が入っていたビニール製の袋がほしいとおっしゃったのです。お風呂に行かれるときに、持つて行くカバンがないからとのこと。破れているからと、ご婦人が渡されなかったもので、私が持つて行った袋を渡させていただきました。新品ではなかったのですが、申し訳ないと思つたのですが、佐藤さんが喜んでくださったのが、とても嬉しく、今も「あの袋を使つてくださっているかな。」と考えると、幸せな気持ちになります。

そして、何通かのお手紙を見せていただきました。それらのお手紙は、全国からこの避難所に来て、佐藤さんに会われた方々が書かれたものでした。佐藤さんはおっしゃいました。「返事書かとねえと思うのが、私の生きがい。元気が出るんですよ。」そのお顔は本当に嬉しそうでした。高校生のひ孫さんがおられる81歳の方にはとても見えない、元気の源が少しわかったように思いました。

昼食の時間になり、佐藤さんのおしゃべりを止めなければいけませんでした。もつと話していたかったです。そう思ったのは、私がお佐藤さんから元気をいただいていたからだと思います。今日は、避難所におられる方が少ないからとのことで、浅野さんがおかずを私たちにも分けてくださいました。そのおいしかったこと！ここにも浅野さんの愛を感じることができました。

午後からは、家具作り、トイレ掃除、校庭掃除に分かれて作業をしました。私は、先にトイレの掃除をさせていただきました。続いて、校庭の掃除に行かせていただきました。最後に、家具作りの仕上げをし、時間になりました。どの作業も、声を掛け合いながら、和気藹々とできたので、あつと言う間に時間が過ぎました。

お別れの挨拶を佐藤さんにさせていただいたとき、不覚にも泣いてしまいました。そんな私を佐藤さんは優しく抱きしめてくださいました。そして、「気を付けて帰ってくださいね。体に気を付けてくださいね。」と、繰り返しおっしゃってくださいました。ずっとずっと私たちのことを気に遣い、帰りのバスに乗り込んだ後も、最後まで手を振ってくださいました。

その後、大川小学校へ連れて行っていただきました。前は、大川小学校のお子さんが避難し、津波にのみこまれた橋の近くからのお参りで

したが、今回は、校門まで行かせていただくことができませんでした。お子さんを亡くされた保護者のお手紙などが置いてあり、お子さんたちだけでなく、保護者や周りの方々の無念さを思うと、涙が止まりませんでした。ただご冥福をお祈りするばかりでした。

私は自分に置き換えて考えることが恐くてまだできません。「自分が大川小学校の教師だったら。」「自分のクラスの子たちが同じ目に遭ったら。」などと考えようとすると、苦しくなります。そして、前回同様、クラスの子どもたちが愛しくてたまらなくなります。

今回もたくさんの「想い」をいただき、帰路につきました。今回学ばせていただいたことは、「人との出会いの意味」です。

前は、作業がメインで、被災地の方との交流はほとんどありませんでした。それでも、被災地で学ばせていただいたことで、「こんな私の小さい力でも、何かお役に立つことがあれば頑張りたい。」と思うことができました。

今回は、浅野さんや佐藤さんにお会いすることができ、これから東日本を考えると、必ずお二人の顔が出てくると思います。いえ、つねにお二人の存在が、私の心の中で、温かいものとなつて、私を勇気づけてくださることでしょう。

「出会いが宝」。今回の出会いが、今まで以上に

私に力を与えてくださったように思います。それは、被災地に向かう力、そして私が私として生きていく力……。浅野さん、佐藤さん、ほか避難所におられる方々、そして、大谷先生をはじめ今回参加されたチームの仲間の皆さん、すべての出会いが私の宝です。ありがとうございます。ありがとうございます。感謝の言葉しか思いつきません。第四回は勤務校の運動会と重なり、参加できませんが、十月以降、できる限り参加させていただきます。これまでもどうぞよろしくお願ひいたします。

★大阪府30代 女性★

私が宮城県の牡鹿半島にある支援センターで説明を受けて、支援の参加させていただいた場所は、水田が「あつた」といわれる鮫ノ浦という地域でした。バスで移動し、その場所に着くと、既に朝から活動されていた団体の方や、たくさんの方が「砂」に埋まっている何かを拾い、分別をするという作業をされていました。第一印象は、『こんなにも何もないなんて！』ということでした。水田の跡形は全くなく、遠く離れた海からこの地まで、津波は襲ってきたのだということです。

私は、前回はボランティアで参加された方にアドバースを受けながら、埋まっている鉄や、網、帆

立の貝殻を、釘や瓦礫、足元の緩い箇所を気にしながら一緒に取り掛かりました。とにかく目の前のモノに集中しました。そうでないと、時々見渡すと、あちこちにゴミやじゆうたん、草履、片方だけの靴、木があまりにもたくさん、たくさん落ちて埋まっていますので。そんな場所ですから、ひとつ拾って分別してもまだまだあります。引っこ抜けないものがあり、テキパキとはいかない作業に、『この一箇所こんな時間をかけていたらきりがないな・・』とも感じてしまうほどです。けれど、午後からは大木リーダーの元、チームを組んでたくさんのものを引っこ抜きました。汗をかいて、かいて、スコップで掘り、やっとなと抜けた鉄の棒は1m以上砂に埋まっていたと思います。メンバーの先生方と『やったー！！よっしゃー！！』と叫びました。とても達成感がありました。とにかく、大谷先生のおっしゃるように「目の前のことを丁寧に」と皆さんの一生懸命な姿から、私もやろう！と力が湧きました。ありがとうございます。途中で、手を洗いに行くと、地元の漁師さんが『ご苦労さま。どこから来たの？』と笑顔で話しかけて下さいました。壊滅状態から、半年が経ったけれどあまり変わっていないであろう風景に、地元の方々はどのような心境かと思うと切なくなりました。

私はこの一日だけ活動させていただき、また帰

る場所があります。そして住む家もありますが、ここでは半年間経っても小学校の体育館で住んでおられる方々がいました。その様子を他の先生方のご報告から詳しく知り、また、どうしようもない気持ちになりました。ですから、私は自分の勤務校で子どもたちに報告をする際には、絶対に偉そうに報告してはいけないと感じました。たった一日活動しただけでは。本当に、「丁寧に」伝えないといけないと思いました。

さらに、衝撃は、津波の大きな災害があった「大川小学校」の風景です。お子様を亡くされた方々の痛みは、言葉にはできないと思いました。私はお線香をあげさせていただき、手を合わせた後、久井様も笛の音を聴きながら、泣きました。何とも言えないこの風景に泣きました。辛いだろうな、苦しいだろうな、という思いがバスに乗ってもしばらく続きました。このような思いを忘れぬために、家族や、今接している子どもたちや、これから出会う子どもたちに、被災地の状況や、まだまだこれから支援が必要であることを伝えていきたいと思えます。そして、その現場に行きたくても行けない方もいると思えます。私もですが、自分にできることをやっていくことが大切だと感じました。

教師として伝えること、大人として、子どもたちに伝えること。大きくは二点です。一つ目、命

を大切にすること。生きてくても生きれなかった方の分まで、一生懸命に生きること。

二つ目、自分にできることをすること。例えば、現場の中学生には、周りの仲間へ「思いやりの声かけ」や「人の痛みはわかる努力をすること」、「暴言を吐いたり、人を傷つける言葉を言わず、優しい言葉を遣い、優しい心で接すること」以上をまず来週から私は教室の生徒に伝えます。そして、バレーボールの顧問をしていますので、部員に伝えます。そして、市のバレーボール大会の開会式のときに司会をしていますので、そこでも伝えていきます。

私は、現場でたくさんの方が参加されていたことに感動していました。日本人すごいな、とも感じていました。ひとりでは「小さな」ことでも、みんなで力を合わすと「できることがある」ということ。そして、「心をひとつに」という思いを大切に日々、一生懸命生きていこうと感じました。ありがとうございます。

最後になりましたが、「日本を美しくする会」の鍵山秀三郎先生のおかげさまで、このような活動に参加させていただくことができました。本当にありがとうございます。そして、大谷育弘先生、大木先生をはじめ、DVDをご準備くださった喜田先生、たくさんの方々とは活動に参加させていただき、たくさんの学びに感謝しております。本当

にありがとうございます。

★★大阪府20代 男性★★

今回、初めて被災地に学ぶ会に参加させていただきました。

三月十一日からずっと現地へ足を運び、何か自分もやらせてもらいたいという心はありましたが、正直に言うと、怖かったです。行っても何もできない・・・そして、大丈夫なのかな？と行かない理由を探していたように思います。

しかし、大谷先生をはじめとする皆さんの志ある先生方の被災地に学ぶ会での報告などを拝見させていただき、一步を踏み出す勇気ももらうことができ、参加させてもらうことができました。ありがとうございます。

さて、今回参加させていただき、学んだことはたくさんありました。

◇亡くなられた方の分まで生きる

↓学ぶ会の最後の行程に、全校児童の七割が津波に巻き込まれて亡くなられた大川小学校へ参り、手を合わせてもらいました。このとき、「無念にも亡くなられた子どもたち、教職員、地域の方の分まで一生懸命生きます」とお約束させていただきました。ボランティア活動として現地に行くことももちろんですが、いま、生活している東

大阪市で一人の人間としてしっかり生きなあかん！と強く強く思いました。この気持ちを忘れず、いつも心にとめておきたいです。

◇ボランティアの人手不足

↓今回、牡鹿半島の遺留品の整理をさせていたいただきました。避難所である鹿妻小学校から一時間ほどバスで移動しましたが、その道中に見た現場の状況にただただ被害の規模の大きさとまどいました。現地に行くと、三千人規模のボランティアが欲しいというお話をリーダーである大木先生からお聞きしました。もうすでに七百人ほどのボランティアが現地にはいたのですが、それでも足りないことに驚きました。同時に！！私の役目が少し見えました。教師という仕事をしているメリットは、皆さんの未来を担う人材と出会い、育てることができるところです。これから出会う三千人以上の生徒たちに現地のことを自分の語る言葉で語り、生き方を見てもらい、一緒にボランティア活動していきます。

◇長所発揮

↓現地に行き、一人一人お役に立てるステージがあるのだと思いました。美術を教えておられる辻先生は、似顔絵を書かれておりました。そのお話を聞きし、自分は、何が一番お役に立てるものがあるのだろうか？と考えさせられました。もう少し整理して、九月二十二日に再度現地へ行か

せていただく、バスの中の自己紹介でお伝えできたらと思います。そして、今、目の前にいる子どもたちにも、それぞれの子どもが彼らの長所をいかし、現地で役立たせられるように、いいところをたくさん見つけていきます！！！！

◇同志の素晴らしさ

↓今回参加された皆様の志の高さ、そして、熱さに感動しました。そんな人たちと一緒に活動する中で、はじめは、恥ずかしさもありましたが、すぐに力を合わせる事ができました。皆様の笑顔や知恵、そして、思いやりの深さにただただ感動いたしました。

◇感謝

↓今回、現地まで安全に運んでくださったバスの運転者の皆様、そして、鍵山先生のご厚意に感謝いたします。さらに、大谷先生、大木先生の素晴らしいリーダーシップに感謝いたします。本当に心よりありがとうございます。

★★和歌山県30代 女性★★

三月十一日から昨日で半年が過ぎました。今回、牡鹿半島の鮫浜で、砂に埋もれた水田の瓦礫の撤去作業をさせて頂きました。爪痕はまだ至る所に生々しく残っている状況です。ホタテの養殖が盛んな地域で、砂の仲にはその

植え付けの素となる牡蠣の殻、漁具等が無数に埋もれていました。震災前にはこの殻が生計を支えるものであったはずですが、それに絡みつくように家の基礎の一部や、鉄骨、ガードレール、トタン板、割れた食器などが砂の中から次々に出てきました。

大谷先生から「今日の目標は、気持ちを込めて丁寧。」というスローガンを頂きました。そのお言葉を作業中にも決して忘れないようにしよう」と心に誓いました。砂に埋もれているものの中には、シャベルで掘り起こし、取りあげるのに苦勞するものが多く、「もうこれ以上無理かも知れない」と思うこともありましたが、その度にスローガンを思いだし「時間がかかっても最後まで諦めずに取りあげよう」と一つ一つを根気よく取り組むことが出来ました。

牡鹿チームは、リーダーの大木先生の指揮のもと、素晴らしい連携プレーでした。尼崎から往復26時間、作業時間は3時間余り。時間の大切さを感じました。それでも、力を併せて、気持ちを一つにして取り組んだことで大変貴重な内容があった3時間となりました。掘り起こすのが難しいものが取り出せた瞬間は、大きな歓声が挙がるほど達成感のある作業でした。

でもそれはあの場所で作業をしていた何百人というボランティアの方々の共通する思いだっ

たと思います。被災地という場所は、日本は復興に向けて人々が確実に何か大切なものを持ち帰る場所に変わってきていると感じます。

私の住んでいる和歌山県も被災地と呼ばれる場所になってしまいました。今回、地元ではなく、東北へのボランティアへ行くことに少し後ろめたい気持ちがありました。しかし、今回学ばせていただいた様々な経験を、しっかりと生かすことができたのならば、決して無駄ではなかったのかなと思えました。近いうちに、地元の復興への力に少しでもなれるように協力させて頂きたいと思えます。

大川小学校では「だいすきな だいすきな 巴那ちゃんへ」とかかれた巴那ちゃんのお母様からの手紙が添えられていました。

三月十一日から半年経った今、更に我が子を思う気持ちは日に日に強くなっていく……。同じ母親として胸がえぐられそうな思いでした。

和歌山へ帰宅してから、自分の子供と対面したときに、思わず抱きしめてしまいました。

最後になりましたが、このような人間として学ばなければいけないことを経験させていただけの機会を設けていただいた「日本を美しくする会の鍵山秀三郎先生をはじめ、心のある義援金を投じてくださった皆様、お忙しい中様々なお世話をしてくださった大谷先生、無事に遠路を運転して

くださったバスの運転手様、そして、第三回被災地に学ぶ会のメンバーの皆様、石巻の皆様、ほんとうに有り難うございました。

★★大阪府20代 男性★★

被災地に学ぶ会初めての参加でした。私は、被災地を知り、活動をさせていたたく中で少しでも「生きる」ということについて考えたく思い参加させて頂きました。バスの中から初めてみる被災地の様子に、ただただ言葉を失ってしまいました。

牡鹿チームの活動内容は、鮫ノ浦で瓦礫(大切な生活用品)の分別作業でした。スタッフの方の話によると三千人規模の人手が必要な場所だそうです。重機が入りやすいようにするために、人の手で木・金属類・貝類などを丁寧に分別していきます。ただっ広い敷地が見渡すかぎりあります。そこには、家や田んぼがあったそうです。家は土台のみが残り、田んぼは砂で埋めつくされてしまいました。そこに建物や、田んぼがあったとはとても想像できにくい景色でした。午前中は、個々で活動をしました。そこで、「弱い自分」に向き合うことになります。一人の力ではびくともしない埋まった金属や無造作に絡まりきった魚網などを手にするたび、すぐにあきらめていました。無力

感でした。一人ではどうすることもできません。しかし、「微力」は「無力」ではない。そう考えて、自分にもできる目の前のものを可能な限り分別していきましました。

午後からは、大木先生のご提案で三人一組のチームで場所を絞り込んで活動させていただきましました。ここで、協力することの大切さ、素晴らしさを学ぶことになりました。一人での活動ではすぐにあきらめていたような埋没物に対して、「三人いたらなんとかなる」という強い気持ちでどんどん掘り起こしていき、埋没物を取り出せることに大きな達成感を得ることができました。協力することにより、一見苦痛な作業も、楽しく感じることで、いつしか活動に一生懸命に取り組むことができていました。瓦礫のようなものでも、被災者の方々にとっては、大切な生活用品であり、思い出そのものにちがいありません。そのように考え、できるだけ丁寧に活動をするということを意識していました。

活動が終わり、お借りしたスコップを所定の場所へ返却する際、大木先生が丁寧に自らの手を使ってスコップについた土をはらい、回収しやすいように重ねておられました。そのお姿からも、物を大切に扱うということを学ばせて頂きました。

鮫ノ浦からバスでもどる途中、ふと山を見上げました。周には高い場所にもかかわらず木が倒れ、

物が散乱しているなかで胸をはるようにして美しく懸命に咲いている向日葵に出会いました。その向日葵は私に「こんな中でも、たくましく生きているんだ」と強く言っているように感じました。私は恵まれた環境で、何不自由なく生かされています。今あるあたりまえは、決してあたりまえなんかじゃない。その向日葵をみて恥ずかしく思いました。「たくましく生きること」をまさに被災地から学ばせて頂くことになりました。

また、最後の大川小学校の訪問では、言葉にならない感情が湧いてきました。献花台の前で目をつむり合掌する中で思い浮かんでくるのは自分が受け持つ子どもたちの顔でした。全校児童の約七割の幼くも尊い命が奪われた大川小学校での被災は、私たち教師が忘れてはいけないことであり、目の前の子どもたちの尊い命にあらためて目を向けさせてくれる記憶となりました。

最後になりましたが、日本を美しくする会のご厚意の元、たいへん貴重な体験をさせていただくことができました。ありがとうございます。また、大谷先生をはじめ多くの先生方や参加された皆様のお陰さまでたくさんの方を学ばせていただくことができました。ありがとうございます。

★★★兵庫県20代 女性★★★

尊敬する先生から「被災地に学ぶ会」のお知らせメールを受けて、行くことを決めました。東北へ行くことを学年の先生方に話すと車で五十分かかる駅まで送って下さることになりました。素敵な先生に囲まれて仕事ができていることに感謝します。

九日の朝はリュックサックを背負って登校。学校を四時に出ました。三田駅まで送っていただき尼崎駅に到着！受付をしてバスを待つ間誰も話す人がいなくて少々不安でした。

行きのバスでマイクをにぎり自己紹介をしました。この会を主催された大谷先生が「今回、被災地では被災者の方と積極的に話してほしい。そのためにも、このバスの中の人同士も積極的に話をして下さい」と言われました。多賀インターに着いたとき一人の方に話し掛けてみました。その方は多分私より年下でしたが東北に行きたいという思いで自分で調べて東京まで行きボランティアバスに乗って行った話をしてくれました。なかなかこの会は私のように変わり者が多いようでした(笑)

多賀から三重県や滋賀県の方が合流され、私の隣には60代ぐらいの奥様が座られました。旦那さんと二人暮らしで時間にも余裕がある私が行かなくてはと一人思いたってこられたそうです。



やっぱり行動力の素晴らしい方でした。

夜は、被災地のDVDを見たり、何度も被災地に行かれています方のお話を聞かせていただきました。本当にバスには志の高い方ばかりだと思えました。

二時間おきのトイレ休憩で夜はあまり眠れないままバスは北へ北へ向かいました。

十日、朝八時に宮城県石巻市立鹿妻小学校に到着！私たちの団体は避難所チームと牡鹿半島チームに分かれました。私は避難所チームになりました。

体育館に入ると床全面に畳がしかれ大人が座ると、少し頭が出るほどの高さのダンボールがパーティション代わりにいくつも立ててありました。パーティションの中に布団や、生活用品が置かれていてお年寄りから小学生まで様々な年齢の方がおられました。

その避難所の世話役の浅野さんという方に始めに話を聞きました。現在仮設住宅に入りたくても入れない、六十一名の方が生活しておられること。市は今月末には避難所を撤去することを決めているが、行き先の決まらない方がまだまだいるということ。そのため、最近になって少し皆さんがピリピリしているように感じるということ。八月いっぱい、鳥取から派遣されていた避難所支援チームの方が引き上げてしまわれたので、今

からは一人で全てやっているということ。震災から半年もたつけれど、問題は山積みでした。

私たちは、仮設住宅に皆さんが移る際に使える棚を、ダンボールで作りました。作りながら石巻市で七月から住み込みで支援を続けておられる45才の男性の方の話を聞かせていただきました。石巻はまだまだ復興が進んでいない。信号もないところがあつて警察の手旗信号でやっている。働く場所もない。国の政策が決まっていなから（この場所に家を建てていいのか。）リフォームも出来ない。仮設校舎で授業をしている学校や中学校の教室を借りて授業をしている学校。瓦礫の山がいたるところにある。

被災地の方とも話しをしました。仮設住宅の抽選は市役所の人がかつてにやるから、どうやって決まっていくのかわからない。子どもが優先されているのか、年寄りが優先なのか。ペースメーカーが入ってるから病院の近くがいいけど入れない。でも、ボランティアの人が来てくれると明るくなつていいわ。と最後に笑顔を見せて下さいました。

午後からは、避難所になっている小学校の中庭の草引きをしました。見ると校舎の白い壁に茶色のスジがまっすぐついています。この校舎も、1m50cm位水がきたそうです。日陰は草引きもしやすかったのですが日向は、力一杯引つ張つても

草が抜けません。よく見ると、その土は黒くて、そのうえに白い模様がついているような状態。そして、ものすごく固かったです。まるでアスファルトのような土でした。きっと海水の影響だと思います。でも、こんな土にも生える雑草ですごいなと思いました。力強い生命力。人も負けちゃいけない。

三時に草引きを終え柵作りを手伝ったあと避難所の方やボランティアの方みんなで記念撮影をして避難所の方と別れました。

その後に向かったのが大川小学校です。大川小学校では全校生一〇八名中、七四名が亡くなられたり、今だに行方不明です。行くバスの中で、大谷先生が「自分の担任している子どもがいつ頃に亡くなったら、どうでしょう：」そんな話をされました。考えただけで、息が詰まりました。先生方は十一名中、十人が亡くなられ残された一人の方は自殺されたということでした。大川小学校に向うバスから見た景色はただただ、広く、どこぼこで、草が伸び、所々にシヨベルカーと瓦礫の山。小さな舟も土の上に無造作にありました。バスから降りた場所は、子どもたちや先生方がちょうど津波に流された場所でした。そこに立った瞬間から胸が詰まり涙があふれてきました。小学校の校門だったところに追悼の文字が書かれた柱があり献花台がありました。たくさんの花に囲ま

れた中にまだ見つからない子どもへお母さんからの手紙がありました。私は辛くて読むことが出来ませんでした。

久井さんという方が追悼の笛を吹いて下さりお線香をあげさせていただきました。涙が、ただただ流れました。たくさんの命が亡くなった。でも、私は生きています。学校に帰れば子どもたちがいる。私は与えられた命を精一杯生きなくてはいけない。目の前の子どもたちも精一杯のことはしてやらなくてはいけない。そう思いました。

この大川小学校で感じたことが今回、東北にいて一番深く心に残ったことでした。自分が精一杯の生き方が出来ていないときこれからは大川小学校のことを思い出します。私は生かされていることを思い出します。

今回このような機会を与えていただいた日本を美しくする会の鍵山先生、会を支えておられる皆様、大谷先生、連絡を下さった金先生、一緒に行かせていただいたボランティアの皆様、浅野さん、避難所の皆様、今は亡き大川小学校の皆様、本当にありがとうございます。感謝の気持ちでいっぱいです。私は生かされて生きている。それを忘れないで私は、精一杯、顔晴ります！

★★大阪府40代 男性★★

今回で「被災地に学ぶ会」への参加は三度目となります。鹿妻小学校避難所の世話役浅野様から大谷先生へ、大谷先生から「日本を美しくする会」の阿部様へ、そして鍵山相談役へとお話が伝わり、現地での追加支援のゴーサインが出たのはたった二週間前。募集から現地支援まで二週間足らずで、今回四十一名の「学ぶ会」となりました。皆様のご行動の速さに驚嘆するほかありません。

バスのチャーター費用、現地での活動のための資金は全て「美しくする会」からのご厚意であり、そのご厚意は老若男女の皆様のお志です。小学生の方が雑誌を買うのを辛抱して下さったお金であり、諸兄姉が定期預金を解約してまで下さった、まさに思いのあふれる義援金なのです。私はそこまでしてご厚意をいただきながら、いったいどれくらいご期待にお応えできる活動をしたのか自己反省を交えつつ、その活動報告をさせていただきます。

今回、私は牡鹿半島鮫浦(さめのうら)地区で、瓦礫処理に携わらせていただきました。鮫浦は半島の付け根の太平洋側にあり、山間部を縫うようにして、バス運転手の方のご苦勞のたまもので到着できました。入り組んだ山々の間から海が見えます。自分たちがバスから降り立った土地は、山と山に囲まれた中の広大な砂浜でした。それは東京

ドーム五個分くらいの広さでした。

しかし、それらは砂浜ではありませんでした。足元をよく見ると、来た道を挟んで片側にブロック塀や水道管、材木が散乱しており、この地が民家の集落であったことがわかってきました。もう片側に目をやると、カキの貝殻が糸にくぐられたまま大量に出土していました。どうやら、その一帯は養殖場か加工場であったようです。また、それ以外の土地は田んぼだったと現地の方から聞きました。どちらにせよ、決してそこは砂浜ではなく、人々のゆたかな暮らしが営まれていた集落だったのです。

現地のボランティアセンターの方々には廃屋となってしまった公民館を利用して、窓もなく、壁も落ちてベニヤ板で応急処置をしている程度のも落ちて現場さながらの仮住まいで活動なさっていました。そこに、今回他府県からのボランティア団体も加わって総勢七百名ほどだった返していました。これだけの人数に対して、私たちにお仕事を割り当てて下さる世話役の方は二名ほど。もちろん、お二人は忙殺されていました。半年の間、その方々は忙殺され続けているのです。世話役の方がおっしゃいました。

「鮫浦地区には三千名規模のボランティアがほしい」と。砂浜と化してしまった水田や民家の一帯に、重機を入れて大型の瓦礫を処理したい、し

かしそのためには重機が入れる通路をつくらなければならぬ、とおっしゃっていました。つまり、私たちの今回の活動は瓦礫処理の重機を入れるために、広大な「砂浜」からめぼしい瓦礫を全て撤去することだったのです。それは、具体的には、家を支えていた柱やブロック、加えてカキの貝殻、水道管などを分別撤去する作業でした。また「カラ差し」といって、穴を開けたカキの貝殻を糸に通してひと塊にする作業もありました。

午前中は思い思いの瓦礫を各自で処理していましたが、午後からは作業方法を切り替えて、三人でチームを組み、スコップ係や瓦礫引っこ抜き係を分担して、まずは一カ所に全員の作業場所を集中させました。そうすると、午前中より達成感や連帯感が沸き起こって、疲れても疲れが感じないようになりました。私は、大谷先生からこの地でのリーダーを拝命しながら、指示等の段取りの悪さでチームのメンバーにご迷惑をおかけしました。自分自身が成長しないと、みなさまにご迷惑がかかるのだと深く反省しております。

例えば、七月初旬の第一回、八月初旬の第二回では、ともに個人住宅での遺留品整理をさせていただきましたが、それも大谷先生や現地の世話役の方のご厚意であったと気づかされました。個人宅を全員で取りかかると、整理するべきもの、撤去すべきものの判別も簡単なうえ、達成感や連帯

感も生まれやすいものです。しかし、今回のような広大な地域では、ブロック塀一つを見つけてもそれが自分にとって運搬可能かどうかは、実際に持ち上げてみないとわかりませんし、砂に埋もれて鉄筋で他のブロック塀と繋がっているなどして、人力では運搬不可能(重機に任せるしかない)というケースもたくさんありました。私たちは第一回、第二回では達成感や連帯感の生まれやすい対象ばかりを扱わせていただき、非常に優遇されていたのでした。

木材やブロックなどを見つけ、周辺の砂を掘り起こして運搬可能かを判断し、不可能であった場合には諦めなければなりません。その時の虚脱感には抗しがたいものがありました。また、見た目についても、全景からすればビフォア・アフターのはっきりとわかりにくい状態であり、心が折れてしまいそうでした。しかし、ご一緒させていただいたメンバーの方は皆様「もぐらの宝探し」などと言って肯定的に受け止めて下さり、共同作業のなかで心の栄養が一杯に満たされました。メンバーの方々に感謝申し上げます。

夕刻になって鹿妻小学校に戻ると、今度は避難所の方々との再会です。私はすでに数名の方と文通させていただいていたこともあり、避難所の扉を開けるとすぐに、感激して走って会いにいきました。そのうちの一人のご婦人は、ご自分で描い

た絵はがきを瓦礫の下から引っ張り出して、そのおはがきで私にお便りを下さっていたのでした。その文には「汚れています、又味のある物」とあえて軽い口調で書かれており、私はその文を見て、ご婦人の心中の苦しみをひりひりと感じました。私は今回その文通相手のご婦人と握手をして、目と目でお話をしているうちに、目も心もじんと熱くなりました。「会いたかった」。

私にとって石巻市は故郷になりつつあります。瓦礫、廃屋、地盤沈下した岸壁が、自分の心象風景の日常となりました。ですから、今こうやって帰宅し、静かな自室で感想を書き、窓の外には近所の家々が見える―この景色の方が「非日常」のように思えてきました。ご近所には、倒れたブロック塀もなく、割れて粉々になった窓ガラスも、折れた電信柱もありません。

東北の震災復興は日本にとつての永遠の命題です。いつも被災された方々に心を寄せて、奇跡の復興を必ず成功させるべく「積小為大」の精神で活動してまいりたいと思います。

今回も活動にご理解と多大なるご協力をいただき、本当にありがとうございます。二週間後に、また石巻まで「(至らない自分への)リベンジ」をしに行かせていただきます。今後ともよろしくお願いいたします。

★★大阪府20代 男性★★

第三回被災地に学ぶ会に参加されたみなさま、そして日本を美しくする会のみなさま、本当にありがとうございます。第一回、二回と引き続き参加させていただきました。避難所での活動をさせていただく中で、今回もやはり浅野さんの心配りの深さに、ただただ恐縮いたしました。我々が作業をしやすいように気を配ってください、我々が避難所で作業をすることができたのは全て浅野さんのおかげです。自分が何かをやったとかそういうことはどうでもよいことであって、陰で支えてくださっている方がおられてこそなのだと強く感じました。浅野さんの厚意を受け、自分に足りないものを痛感しました。浅野さんが以前言っておられた「普段の行動が全てではないでしょうか」という言葉が胸にスッと染み込む思いがありました。私は普段から頭で考えて行動をする癖があります。そして気が付かないうちに傲慢になっている自分があります。浅野さんの行動のスピードと深さ、そしてそれをずっと継続してやっておられる姿を目の当たりにし、自分自身もこのままではいけないと強く感じました。頭で考えるのではなく、お腹で感じて動くことができる人であるように、常にそういう人であるように、「普段から」ただただ謙虚に行動していこうと胸に誓いました。

仮設住宅での活動についてご相談させて頂いたときも、全ての方に喜んでもらわなければと力が入りすぎていた我々に、「肩の力を抜いてやってみては？」と的確にアドバイスをして下さいました。六ヶ月間という長い間、避難所を引っ張って来られた浅野さんだからこそそのアドバイスでした。喜んでくださる方がおられるのなら、仮設住宅での活動もさせていたいただきたいと感じました。

大川小学校にも立ち寄りさせていただきました。今回で三度目なのですが、立ち寄りさせてもらうと、いつも自分の学校の子どもの顔が頭に浮かびます。

「全力で子どもたちに接しているか?」「中途半端なこととはしていないか?」と自分に問いかけました。その答えはわかりませんが、とにかくすぐに子どもたちと会いたいという気持ち湧きました。教員という職業に会い、大好きな子どもたちと会い、私は本当に幸せものだと思います。子ども達のために一体なにができるのか。自分はどうあるべきなのか。常に自分に問いながら、全力で子ども達と接していきたいと思えます。大谷先生をはじめ今回の学ぶ会に参加されたみなさま、長時間運転して下さった運転手のお二人、日本を美しくする会のみなさま、そして避難所のみなさま、浅野さん、本当にありがとうございます。

います。たくさんの学びをいただきました。すべての方に感謝しております。

★★大阪府20代 男性★★

考えてみれば特に理由もなくバスに乗っていた。石巻に行く志がパツとしなかった。でも、東北に行って何か学びたいという気持ちはあった。

早朝、ビデオを見た。黒い津波に灰色の空、地獄を作り出したあの日の自然。それが今日は青々としている。なぜか憎かった。現地の人には聞きそびれてしまったが、いつもは美しい海や空がその日だけ脅威になったこと、どのような気持ちになったのかを知りたかった。私自身このことがその日の朝から気になって、一日を通じて石巻の美しい空を見ていた。

バスから降りて鹿妻小学校に入る。道中あまり大きな被害を見る個所が少なかったためか、本当にここが半年前に災害に巻き込まれた場所なのかと感じた。正直想像よりも被害は少なかった。石巻全体が荒廃しているのかと考えていたの少し安心した。メディアでは特に被害の大きな場所しか取り上げないので、知らない事実を早速知ることができた。

鹿妻小学校には、サッカー少年が通学していた。「もう日常が戻ってきてるんか。」そう感じさせ

たまま体育館に入る。でも違っていた。徐々に生活が戻りつつある人と、まだまだ辛い避難所生活を強いられている人がいた。私自身も辛かった。何か重い空気が体育館にはこもっており、静かでは音は重く響くことがない。唯一テレビが声を出すだけ。疲れた避難所生活を物語るようにひしひしと伝わってきた。

ここで作業をさせていただく。気合を入れて段ボールを切り出した。調子が良くなってきて楽しく話しながらできた。しかし油断したのか指を切ってしまった。それを機に、今もお避難所生活をしている人たちに話を聞きに行く気持ちに切り替わった。しかし、私はすごく圧力を感じてしまった。話す気持ちが閉ざされて、自然に体育館の隅っこを歩いていた。幸いそこには三人の学生や児童が楽しそうにゲームをしていたので、抵抗なく話しかけることができた。だが、楽しそうにしているも明るさがなかったように感じた。できることがこれくらいしかないからやっているようなそんな雰囲気だった。すると気持ちがまた変わった。話を聞くよりも何か楽しんでもらいたい。関西人ならこの子たちを笑顔にさせなあかん。となにか使命を自分で与えて、持ち芸をした。話を聞こうとする間は、距離があった関係も、笑顔になつてもらおうとすると、自然に向こうからの言葉のパスが回ってくるようになった。話は聞けな

くなくてもいい。私を見て、あほやなって感じてもらえたらいい。そう考えられるようになった。一瞬でも不安から意識をそらしてもらえることが私にとつても嬉しかった。

昼食はコンビニに行つて買ったが、その道には爪痕がひっそりと残っていた。雑草の生い茂る機能を失った田んぼには船が横転し、迷い込んだ車のガラスにはヒビが入っていた。ところどころ傷を残したままに、直された軒先の扉には、本当にここまで津波が来たのかという疑心と本当に来たからこその光景が不思議だった。

どんなにイメージしても及ばない現実があったこと現地に来てでも理解することが難しかった。その想像を超える災害を乗り切り今を懸命に生きる人たちは、どれほど強く、どれほど美しい心を持つているのかと考えると、自分の今の暮らしがすごくありがたいことと、幸せを見失いかけていることを気づかせてくれた。人生をかけて石巻の人たちは我々に生きる意味を教えてください。それをもつともつと見つけ出し、学び取らなければ失礼だ。災害を受けた人にとつて、私たちは幸せ者にしか見えない。私ならそんな人を妬んでしまう。なのにとくさんのありがとうを言つてくださる。何度もまた来てくださいと言つてくださる。どれほど現地の人は大きな心を持っているのか。関わった人数は少なくとも、それを考

えることができたことは大きな学びとなった。帰り際、段ボールでできた棚を見て、誰か一人の役にでも立てたのかなと満足しそうになったが、まだまだ足りないことがある。何かもつとできることがある、誰か一人にでも日常を取り戻すためのカケラを渡したいと次回の課題を見つけたことができた。

これからの復興を待つのではなく、少しでも復興の力になれるようになりたい。今切った指を見るたびに石巻を思い出せる。とにかく今は普段の生活ができていて自分に感謝する。それが現地で学んだなかでできる宿題だ。次回はただ行くのではなく、自分でも何かできるように用意していかせていただきたい。今回の学ぶ会で関わった仲間と石巻の人々には、私に勉強させて下さったことに感謝いたします。そして陰で支えて下さっているたくさんの方々にも機会を与えて下さったことに感謝いたします。

★★奈良県30代 女性★★

初めて参加した時は、とにかく自分が暑さへばつてしまわないように、迷惑かけないように：と思うことで精一杯でした。でも、帰りのバスで、地元の方とつながっておられた方々の言葉を聴き、私も、そういう言葉をかわしたかったのだと

感じました。そして自分の視野の狭さ、つながる力のなさを痛感していました。

二回目にはどうしても参加できず、けれど雄勝町の方々から頂いたぬくもりが忘れられずあちこち探して他のバスにも参加しました。その時の作業場にはトイレはありませんでした。その時はこれが当たり前の現状でした。改めて仮設トイレを用意して下さった雄勝町の方々、そしてそのきつかけをつくってくださった「日本を美しくする会」の方々の存在の大きさを感じました。

作業の合間に交わせることができたら地元の方と言葉をかわそう：と少し周辺を歩きました。なんとか交わせたものの、二回目の大谷先生から届いた浅野さんのお話にはかないませんでした。(かなう、かなわないということではなく、)浅野さんが話そうと思えるつながりを大谷先生方はつくられておられるのだと感じました。

一回目の参加の時も、大谷先生を通して知る二回目の様子も信頼してもらえてこそだと思おうです…。

やはり私は、臨時号の今回もなかなか動けませんでした。信頼してもらえないような自分でないことが一番大きな壁でした。でも、一回の気持ちがよくよみがえり、気がつくとおじさんの所に向かっている自分がいました。はっと我に返りまた足をとめてしまいました。ちょうどシップをはろうと

されていて、

「良かったら、はりましようか」と声をかけました。ころよく、「じゃあ」とおっしゃってください、はらせて頂きました。

「私は、足腰が悪いから…。」

と話し始めてください、

「あの時も(三月十一日)病院にいたんです。」

と。次第に緊張している自分がいました。私が聴かせていただいでよいのか：不安でした。初めて出会うこの方の心に土足で踏み込んではいかと終始不安でした。でも、おじさんは話してくださいました。

「今でこそ、こうやってみんな笑顔も出るようになったけど、初めはいさかいかもあつたし、大変だったつちや。浅野さんも、本当に大変だったと思う。あの日は本当に大変だった：体育館もぎゅうぎゅうでほこりだらけだし、みんな着の身着のままで臭いも…。自分の家は沢山の車が突っ込んでめちやくちやで。見に行くのも辛かった。それに見に行くのはまだ、やめた方がいいとも言われた。人が流れているかもしれないからと…。こんな小さな子から、年寄りまで：遺体が毛布にくるまれて並んでいて…木にひっかかっていたりもして…。」と話されるおじさんの言葉をどう、私は、聴いたらいいのかとまどいながら私が泣くわけにはいかないところなのですがあまりの衝撃

にこらえることができませんでした。

沢山お話をしてくださいました。そして、「こらえていろいろしてもらえて本当に感謝しています。だけど、これからは大変だと思う。仕事もないし。でも、これからは、自分たちで何とかしないとね。私らもだけど、若い人らはもっと大変だと思う。あなたも、大変だけど、頑張つて。」とおっしゃってくださいました。あたたかさや強さ、いろんな気持ちが入り交った感情が私をその場から離さず長居をさせていただきました。

今回の臨時号、浅野さんの思いを受けられる大谷先生や、大谷先生の思いに背中をおしてください「日本を美しくする会」の方の中で私も参加させていただき本当に感謝しています。

帰りには手を握って見送ってくださいました。お話をあまりできなかった方も笑顔で送ってください、おばあちゃん最後まで手を握ってくださいました。

一回目同様、頂いた気持ちの大きさが言葉にできないくらいです。

浅野さんの気遣いにも本当に感謝でいっぱいです。

今回の臨時号。浅野さんの思いを受けられる大谷先生や、大谷先生の思いを背中をおして応援してください「日本を美しくする会」の方がいてくださったおかげで臨時号がたのですね。そんな

今回に、参加させていただくことができ本当に感謝しています。ありがとうございます。

★★大阪府20代 男性★★

今回三回目の参加させてもらうとともに、知り合いを三人も一緒にさせてもらい感謝の気持ちでいっぱいです。

三回目になりますが、毎回学びを頂きます。今回も大谷先生始め日本を美しくする会の方々、現地の方がいてさせてもらっている。感謝の気持ちでいっぱいです。

現地では牡鹿半島近くの鮫浦地域で活動させて頂きました。まだまだ手つかずの地域であるものの復興には人手が足りない現実がありました。今までは大谷先生のご好意で一軒をみんなで遺留品を探す活動できていました。最初時間もなくみんなバラバラで作業にあたりましたが、達成感もなく自分の無力感だけでした。しかし、お昼からはリーダーがまとめてくださりチームで活動することができました。そこには、自然と交流が生まれ協力している姿がありました。また、作業にも変化があり明らかに進行しているものでした。

その中、自分は一人でもくもくとさせてもらう時間も頂きました。それは、みなさんが作業に入

ってきやすいように玄関というのか入り口の整理でした。入り口を片付けているうちに、「丁寧に両手でさせてもらう」というテーマにもどることができました。

一人の力はすくなくかもしれないですが、ひとつひろえればひとつだけきれいになる。を胸に取り組めたことがよかったです。

今回参加されていたみなさんや現地でお会いしたかた、また裏方として支えてくださっている方に感謝しています。ありがとうございます。

最後に、お風呂呂に入っていた時出会った現地の方がいっておられた「手紙でのやりとりは生きる力がわいてくる」「遠くにでも知ってる人、自分のことを思ってくれる人がいれば勇気ややる気がわいてくるんだよ」という言葉。自分のできることが少し見つかつたように思います。ありがとうございます。

★★大阪府20代 女性★★

私は、第二回に引き続き今回二回目の参加でした。第三回は急遽募集メールが届きましたが、迷わず「行かせて頂けるのなら参加したい」という気持ち強く即申し込みました。

今回は、一日中避難所で段ボールを切り、家具を作るという作業をさせていただき、また作業の

合間には避難所の方に声をかけお話をさせていただきました。私が一番に向かった先は、前回お会いして津波の様子を詳しく語っていただいた佐藤さんという81歳のおばあちゃんの元でした。

佐藤さんは、たくさんのボランティアの方々や交流があるにも関わらず、私のことを出身地までしっかり覚えて下さっており、手紙をもらうことで元気になる。勇気づけられる。返事を書くのが今一番の楽しみとおっしゃっていました。確かに、前回会った時よりも元気そうなお顔をされており、とても嬉しくなりました。また、佐藤さん以外にも木村さんやみさとちゃん、結花ちゃん、名前の知らない方々とも再びお会いでき元気な姿を見ることができて安心しました。

作業の後は、前回と同様に大川小学校へ行き線香をあげさせていただきました。子どもを亡くした親の思いが書かれた色紙や自衛隊の操作活動の様子の写真、そしてあの光景を見ると涙が出るどころか私は「あの裏山に逃げたら助かったかもしれない」という裏山を見つめたただぼーっとしていました。

今回はたった一日、それも数時間の作業でしたが、今回のテーマであった「気持ちを込めて丁寧に」家具作りを行うように努力し、また一緒にボランティアとして参加なさっている教師をはじめ人生の先輩方と会話をしながら協力しとても

有意義な時間を過ごさせていただきました。

ボランティアに参加したことで満足し終わるのではなく、この機会を通して学んだことを家族や友達、子どもたちにどう伝えていくか、今後の自分について考えていくかが大切だと思います。「百聞は一見にしかず」では、ありますが、できるだけ多くの周囲の方に写真を見せたり、被災地の現状を話したりして、今後も被災地ボランティアを続けていきたいです。

この被災地に学ぶ会に参加なさっている方は、ほんとにみんな一生懸命働きます。「私は歳がいつているので若い人のように働けません。つかえませんが・・・」と自己紹介のときに話された方々も私の何倍もせつせと働いている姿に頭が上がります。また、後輩や年下の高校生や中学生が頑張っている姿を見ると「負けずに頑張ろう」という気持ちになります。他にも、家庭を持たれている大人の方もたくさんいます。若い教師もたくさんいます。このように志の高い素晴らしい方々と一緒に過ごさせていただくことで、学ぶことが多く、自分の至らなさを思い知らされます。まだ若くて未熟かもしれませんが、こんな未熟な私にもできることはたくさんあると思うので、自分ができることを考え、見つけて行動していきたいです。今回も学びの多い貴重な三日間でした。ありがとうございました。

★大阪府20代 男性★

何事にも代えることのできない貴重な経験ができた「被災地に学ぶ会」でした。

私はボランティアというものに参加することで自分が今回初めてで、最初は不安もあり、言葉として適切ではないかもしれませんが、楽しみでもありました。現地に着するまでは、実際に被災地の現状を自分の目で見ていたいという興味本意で参加しようとしていた自分の考えが恥ずかしく思うほど、現地の状況は自分の想像を超えていました。

震災から約半年が過ぎ、私の心の中では「ある程度の復興・復旧は進んでいるだろう」と勝手な思い込みを持って現地に行きました。しかし実際の被災地は、まだ多くのことで苦しんでいる方たちが、大勢いることに大きなショックを受けました。

今回は『自分のできることを急がず丁寧に』というテーマを、大谷先生がおっしゃっていたので、私自身すぐくせつかち性格でもあるので、テーマを常に忘れずに行動しました。

避難所で活動をさせていただいている時に、「被災された方たちと積極的にコミュニケーション」を取ってくださいと言われたので、避難所の方たち数人に、当時の状況などを聞かせていただきましたが、話を聞いているだけでこちらが辛

くなるような内容のことまで話していただきました。

私たちが現地に行くまでに、他の方たちに何回もお話しされたであろうことまで、嫌な顔ひとつせずに、目を見て話してくれたことが、すごく印象に残っています。

話を聞かせていただいている間、こちらから質問をしても笑いながら答えてくださいました。今でも辛い状況が続いている中で、本当に強い人達だなと、心からそう感じました。

それと避難所をずっと運営されている浅野さんは、おそらく計り知れないほどの苦労をされているだろうと感じましたが、自分が一日あの避難所で活動させていただいて本当に力になれたのかすごく不安です。避難所から帰る時も、一人一人に挨拶と握手をしていただいて、本当に素晴らしい人だと心から感じました。

大川小学校を実際に見学できた事も本当に貴重な経験になりました。

映像や写真で見たことはあっても、実際の状態を見ると言葉が出ませんでした。適切な表現が出てきませんが、被害が大きさ、亡くなった方やその家族が無念だったことは感じる事ができたつもりです。

大阪に戻ってきたその日が震災から半年に当たる日で、多くのニュースが流れていましたが、



被災地に行く前に見ていた感覚とまったく違っていたことに、自分が一番驚きました。

「今回の震災のことを忘れないこと」「継続して支援すること」「自分には何ができるかを考えること」、これらはこの半年間で何度も耳にした言葉ですが、今ではその言葉がどれだけ大変で大切なことかを、理解できるようになりました。

私は現在教師を目指している立場にいますが、今回のこの経験をどうやって子どもに伝えていくかということ、これから時間をかけて考えていこうと思っています。

もちろん、ボランティアにも継続して参加させていたたくつもりですし、関西は現在台風の影響で、大変な地域も多くあります。

今回のボランティアをきっかけに、今後は自分のできることから少しずつやっていきたいと思っています。

最後に、今回この活動を提供していただいた大谷先生をはじめ、運転手の方や、一緒に参加された方に心から感謝します。ありがとうございました。

★★大阪府40代 男性★★

この度、初めて石巻にボランティアに参加しました。このような機会を与えていただきありがと

うございました。

実際に参加してみた感想を書かせていただきました。行きのバスの参加者の自己紹介の中で、熱い思いを聞いているうちに、かつて自分が襪に参加した時に感じた今まで気付いていなかった生きていく上で大切なものに気付くような気がしてきました。現地に到着して体育館に入り、TVなどで観た光景を目にした時、自分はここで何を貢献できるのだろうかと思っていました。

ダンボールの家具を作ること、被災されている人とお話するミッションを思い出し、まずはここから始めることにしました。家具作りの頃合いを見て、一人の方とお話しました。地震があった日のことやご自身の体の事を聞きました。震災で行きつけの整形外科の先生が亡くなってしまったこと、連れて行ってくれる人が身近かにはないものであまり治療に行くことが出来ないと言われ何も言えなくなりました。そのことに関して何も出来ない自分は話を聞くことに徹しました。

午後からは老人ホームを訪問しました。そこに居られる人の絵を書いている先生と比べると、あまりにも貢献出来ていない自分を深く反省しました。けれども、普段からしていないことを被災地で突然、出来るようにはならないので、普段から自分が被災地で出来ることを意識しておく大切さを学ばせてもらいました。

今回の自分の東日本被災地ボランティア体験は、貴重な体験させていただきました。次回参加する時は、もっと貢献出来るように準備しておくことを心がけながら日々、過ごしていきます。ありがとうございました。

★★大阪府10代 女性★★

私は、東北に行つて良かったと思います。私は、日頃家の片付けもろくにしないので自分が少しでも変わったらなあ、それと向こうの人の少しでも役に立てたらなあ、という気持ちで行きました。石巻市に着く前に見た大川小学校が大変なことになっているという話を聞いて私は正直なんとも言えなくなりました。生徒の七割も亡くなって先生もたくさん亡くなって今の私には想像もつきませんでした。

そしてしばらくして石巻市に着きました。最初にダンボールで本棚を作りました。自分はずっとも不器用なのでちゃんと出来るか不安でしたけどやる前に大谷先生に「丁寧にやりましょう」と言われていたので頑張つて丁寧にしました。それでもけっこう難しかったので切る時がんだりしてしまいました。自分のはそんなんですから使ってもらえたらとってもうれいす。その後掃除をしました。枯れ葉を集めて捨て

たり、雑草を抜いたりしました。家ではやる気も全くなくて、やつても雑にしていたけれど頑張っ  
て一生懸命やりました。途中で福岡からフェリー  
で来られていた警察官の方が手伝ってくださり  
ました。約一ヶ月くらいおられたそうでとてもす  
ごいなと思いました。

そしてもう一度避難所の中に戻っておばあさ  
んと話をしました。おばあさんは津波のことを語  
ったり、避難所のことを語ったりしてくれました。  
とても大変そうでした。最初の方は寝返りもあまり出  
来ないくらい狭かったそうです。私はそんなの耐  
えられないと思いました。

そして避難所とお別れの時、掃除の後にお話し  
たおばあさんが私に泣きながら「来てくれてあり  
がとうね。気を付けて帰ってね」と言ってくれてあり  
ました。逆にこつちが学ばせてもらって私が「あ  
りがとうございました」という気持ちになりました。  
私なんかが少しでも役に立ったならそれだけ  
です。でもうれしかったです。

そしてお別れして、大川小学校へ行きました。  
津波にのまれた橋が少し崩れていました。ガード  
レールも曲がったり、折れたりしているし、瓦礫  
の山もあってとてもむごい風景でした。そして校  
舎はガラスすべてがなくなっていて中はいろん  
な物が落ちていました。慰霊碑にはいろんな物が  
置いてありました。お線香をあげる時、久井さん

が鎮魂の笛を吹いてくれました。笛が鳴っている  
時さっきまで止まっていた風車がカラカラと  
鳴り出しました。そしてお線香をあげました。そ  
してバスに戻りました。これで終わったんですけ  
ど、大川小学校はやっぱり忘れられないです。津  
波で七割も亡くなるなんて、正直やっぱり考えら  
れないんですけど、もし友達が亡くなったら…そ  
う考えるだけで悲しいです。

私は今まで友達を大切にしてきたのかなあ  
ちゃんと役に立ってたり、楽しませたりできたのか  
なあ。先生にことや、親のことをちゃんと聞いて  
いたのかなあ。と自分のことを見つめ直しまし  
た。これからはきちんとそのへんが出来るように  
少しでも変われるように頑張りたいと思います。  
一緒に来てくださった方々、色々ありがとうございました。

★★兵庫県20代 女性★★

私は牡鹿半島の鮫ノ浦で作業をさせてもらい  
ました。作業自体は力仕事だったので、ほとんど  
お役に立てなかったらと思うんです。でも、一  
緒に作業してくれた方たちはみんな優しく、協  
力して何かに取り組むのは楽しいことだと改  
めて思いました。しかし、こう感じる事ができ  
るのは半年たった今だからかもしれません。

また、鮫ノ浦に来ていたボランティアの方たち  
の数にも驚きました。日本各地から、また海外か  
らもたくさん来ていました。私はその中でも本当  
に少ししか出来たことはなかったけれど、阪神大  
震災の時に助けてもらったお返しになつていれ  
ばいいな、と感じました。そして、牡鹿半島とい  
う場所は海も山も本当に綺麗なところでした。あ  
の場所に、またたくさんの人たちが帰ってきてほ  
しいなと願いました。

作業のあとに行った大川小学校は、悲しい気持  
ちとたくさんの愛で溢れていました。いつだった  
か、おばあちゃんが私に言ってくれた言葉を思い  
出しました。

「死んだ人の分まで生きようなんて思っちゃ  
いけない。人はその人の分しか生きれないから。  
でも、覚えていてあげようね。たくさんの人が亡  
くなった日があったんだよ。」

私は、16年前に神戸で被災しました。でもも  
う16年前のことで、私は大きくなってやりたい  
ことも見つかって、仕事も出来るようになって、  
これからもあの震災のことをどんどん忘れてい  
きます。今回、ボランティアに参加させてもらっ  
て、またちゃんと思いを出しました。それはあまり  
良い思い出ではないと思います。でも忘れてはい  
けない思い出なんだと改めて感じました。私は  
あの震災のことをちゃんと覚えておくために、今

回ボランティアに行ったのかもしれない。

今回は、自分のためだけでなく、被災された方たちのことをもっと応援できるようにになりたいと思いました。また参加させていただけたら光栄です。本当にありがとうございました。

★★大阪府20代 男性★★

「どうしようもないことがある。」

「でも人は一人で生きているわけじゃない。」  
そう実感できたことが今回の大きな学びだったように思います。

本当に単純に、地震津波の被害はすごかった。しかし、避難所の方々はしっかり生きていらつしやつたし、支える方々の力強さを感じることができました。また自分ひとりでできることの少なさ、自分の心の弱さも知りました。

私は一日ダンボール家具を作っていました。家具にするのに使うダンボールはいつも見慣れているダンボールの三倍くらいの厚さがあったので、切るのには硬くて、手は痛いし、単純な作業だし、正直面白くないな…とも少し思いました。想像力が非常に足りなかったのだと思います。避難所の方々の我慢に比べたらいしたくない作業、そして一生懸命に我慢して、くいしばって生きている方々を支えるもの作っていると

いうことを言葉で分かっている、心は分かっています。ませんでした。

しかし、自分の周りには、一生懸命な目をした人たちがたくさんいました。その空間と一緒にいれる心地よさ、自分のしていることを本当に一生懸命しなくちゃいけないとそう思えるものでした。

「ていねいに」

という言葉も心から実行することができました。僕は、将来小学校の先生になりたいです。きっとたくさんの人に接していくのだろうなと思います。いつだって「ていねいに」を忘れないようにしようと思います。目の前のことを「ていねいに」そして、たくさんの人と共に生きていること。それは、自分の力を受け止めてくれる人がいるということ、自分の弱さを支えてくれる人がいるということ。だからこそ、何事も頑張ってみようと思います。多くの学びをありがとうございました。

★★大阪府30代 女性★★

このたびは「第三回 被災地に学ぶ会」に参加させていただき、ありがとうございました。三日間で沢山の事を学ばせていただきました。全てご支援の賜物、心より感謝申し上げます。

私が参加した動機は、被災地を自分の五感で感

じたかったことと、そこで自分自身何をどこまでできるのか、確かめたからです。

震災後、復興が思うように進まない被災地の事や放射能に関する危険な情報があちこちから入り、その恐怖も感じつつ、現地の事も気になりながら、安全な場所での活動だけをして暮らしている自分に疑問がありました。自分の身を大事に守って、何をやるの？そう自問した時に、自分自身が納得のいく答えを出せませんでした。もちろん、できる範囲の支援も大切ですし、関西圏にも状況は違えど助けを必要としている人はいるし、そういった人たちのお役に立つ事をするのも必要な事です。だけど、それでいいの？現実には、逃げられない、動けない人たちがいて、その人たちはどうなるの？行政を変えるには時間がかかりますし、それまで放置される人々の事を考えたら・・・様々な情報が入るたびに、色んな思いが渦巻き続け、このまま考え続けていても答えは見つからないと思ひ、意を決して参加をお願いしました。

バスが出発して自己紹介の時間には幅広い年齢層と先生方の参加の多さに驚きました。七十代の方から中学生まで、しかも皆さんの高い志を持つての参加に、恐縮千万、とはいえ大変刺激を受けました。車中お隣になった石崎さんは、前回は参加されていたので、漁業の復興話など様々聞か

せていただきました。情報のシェアはとても勉強になります。

翌日石巻市の現地に近づくに連れ、積み上げられた瓦礫や倒れた電柱・一階部分がなくなつた家やガラスの割れた家などがあちこちで見受けられました。やはりテレビや新聞で見ると、実際に自分の目で見るのは大違い。震災と津波の脅威がひとと伝わりました。また、だいぶ片付けられている場所とそうでない場所が明白で、人手の足りなさも伺えました。

そうして鹿妻小学校にある避難所に到着し、家具作りと高齢者宿泊施設での交流を行いました。家具作りは、仮設には必要な電化製品は揃っているものの収納家具はなく、それらを購入する人が多数という現状から、避難所で使用されていたダンボールを再利用して棚を作ろうということでした。まず感じたのは、自分の「無力さ」。棚のパーツを切るところから始まったのですが：手を動かしても、動かしても切れないダンボール。とても頑丈なもので厚みが1.5cmもあり、裁断に相当な力が必要なのです。持参したカッターは大きめのものでしたが、一度のカットでダンボールに貫通することはなく、切込みを表裏両方に何度も入れて、そこからのこぎり仕様のカッターを使いギコギコギコと裁断しました。何時間経つても棚ひとつ仕上げられないことに、苛立ち、

無力感を味わいました目の前にも、同じように苦戦している仲間。けれど彼女達は水ぶくれやママを作りながらも、汗を流して一心に作業していました。それを見て、手の遅い私でもこつこつやれば形になる、そう思え、手を動かし続けることができました。結果として、午前中に棚を仕上げる事はできませんでしたが、精一杯取り組みました。また作業の途中で、衝撃の事実が判明。パーツのサイズに誤差があり、棚は立つもののグラグラと揺れて安定せず、使いものにならないのです。そこで裁断方法の見直しと、出来上がった棚の修正が必要となり、午後には体制を変更しての作業することになりました。

昼食時には、避難所の方からお野菜たっぷりのおかずやジュースの差し入れをいただき、なにかとお声掛けもくださり：皆さんのあたたかいお心遣いにただただ感謝。午前中、大谷先生に言われていたにも関わらず、交流を他の人に任せて作業優先で避難所の方々とは積極的に交流を図らなかつた自分を恥じました。

午後、私は少しかだけ棚作りに関わって移動したのですが、避難所へ戻ってきた時には皆が作った五十を超える棚が出来上がっていました。補強についても皆が知恵を出し合つて、頑強な棚に変化。それを見た瞬間、たとえひとりひとりの力が僅かでも、集まれば大きな力になるのだと感動しきり

でした。

午後のあいわグループホームさん(高齢者宿泊施設)では、辻先生と大西先生の三名で、触れあいの時間を過ごさせていただきました。午前中の反省を活かす時間を与えていただけただけに感謝しつつ、手のマッサージや似顔絵を描いたり、お話をさせていただきました。その際にIさんという方が手に持たれていた地方新聞がチラッと見えたのですが、一面びっしりとお葬式の案内が綴られていました。また、Iさん自身も震災で息子さんや亡くされたらと、会話を始めてだいぶと時間が過ぎてから、お話していただきました。「丁度デイサービスでここに来ていた時で、津波がすぐそこまで押し寄せ、一時は建物の中にまで浸水し、それはそれは恐ろしかった」と。その方々は皆お体が大なり小なり不自由だったので、その時はどれほどの恐怖だったろうと、胸が詰まりました。息子さんが「三月十三日に遺体となって見つかった」と仰られたときにも、何も言えず：そつと手を添えるくらいしかできませんでした。けれどIさんはすぐ笑顔になって再び笑いの花を咲かせてくださり、会長の阿部さんはじめ他の方々も、私たちへの気配りを絶やさず、結局そこでは私のほうが癒していたのだいた時間となり、自分の至らなさに悶々としつつも、感謝の気もちでいっぱいになりました。そうして避難所へ戻って感じた事

ですが、避難所とあいわさんでは、雰囲気や震災についてのお話、「笑い」もどことなく違っていました。受けた苦難や恐怖、見えない苦勞はどちらにもあるわけですが、環境の違いでしょうか。午前中、作業のみ取り組んでいた自分の態度を悔やみましたが、時既に遅し。反省しきりです。

避難所のお話を、もうひとつ。寄贈されたものは、持ち主が避難所となり、処理も現場に任せられているとのこと。そこには本・ダンボールが沢山あり、今後閉鎖に伴い畳や他にも色々出てくるはず。仮設住宅はとても狭く、個人の荷物でいっぱいでしょう。寄贈する側は、贈って終わりではなく、後の事も考えなくてはいけないのだと知りました。ご自身も避難されているにも関わらず、そういった雑務を始め、避難所全体をおひとりで気丈に取り仕切っておられる浅野さん。でも涙もありました。テレビで、山積みに保管されたままの救済物資を見たことがあります。しかしいまいちはん必要なのは物ではなく、瓦礫処理をはじめとする肉體労働の人手や避難された方々との触れあいが必要なのだと感じました。

帰り際に、児童の七割が津波にさらわれ、教職員の方もほぼ亡くなられた石巻市立大川小学校へ向かいました。近づくにつれ、最初に見た光景よりもっと凄い光景が広がりました。戦争の跡地のように壮絶でした。家であつたであろう四角

の土台が続き、崩れかけた家がぼつりぼつりと寂しげに佇み、雑草がまばらに生い茂った、人っ子一人いない平地。バスを降りると、倒壊した家々のものであるう木の香りが漂っており、児童達が津波にのまれた橋の欄干はひしゃげ、鳥獣や魚を祭った大きな石碑の数々は崩れ、学校のそばには土砂・瓦礫が堆く山のように積まれました。

そして、がらんどうの学校。空の美しさがいっそう悲しかったです。皆で献花台に集まり、久井さんによる鎮魂の笛の音が響き渡る中、ご冥福をお祈りしました。

帰りのバスでは各自の報告をシェア、感じた事を分かち合う事で一層深い学びが生まれたと同時に、自責の念に駆られていた心が少し楽になり、成長への意気込みに変化しました。

今回の事は総じて、なにもものにも変えがたい貴重な体験でした。自分の力のほども見えたので、次回参加させていただく時には成果を出せるよう、自分の力を磨いていきたいと思えます。

「日本を美しくする会」、大谷先生、浅野さんはじめ現地の方々、同席させていただいた方々、そして家族や友人・先生方にも、心より感謝申し上げます。このたびは本当に、ありがとうございました。

★ ★ 兵庫県60代 男性 ★ ★

今回二度目の「被災地に学ぶ会」に参加させていただいた。

作業は現在被難所として使われている鹿妻小学校体育館、仮設住宅設置に伴い、不要になった間仕切りに使われていた段ボールの有効活用で二段の棚を作ることだった。仮設住宅には電化製品などは備えられているが、衣類などを整理する棚がないという、さしあたっての応急処置として良い手立てと思う、思い付かれたのはこの被難所の運営を一手に引き受けておられる浅野さんである。

浅野さんも震災当初は避難民の一人であつたが、お手伝いをするようになり運営の中心として活躍しておられる、当初千人もいた避難所も現在は60余名、八月末の予定では、仮設住宅もでき全員が退去するということになっていたが、それが延び延びになり地方自治体からの応援も八月で打ち切られ、そのとぼつちりがいま浅野さん一人の肩にかかっている状況である。

この度の支援活動はその浅野さんの窮状を大谷先生がキャッチされ、急遽「日本を美しくする会」に相談されて今回の支援活動につながった。聞けばメールで発信して数日のうちにスキルの高い若い先生方や学生さん達で定員に達したという。

なにつけても言えることであるが「あと始末」というのは大変厄介なことである。東日本大震災に於いても小は今回の避難所の後始末から、大は福島原発の後処理、各地の瓦礫処理など等やる事は山ほどあるが、それがなかなか捗っていないのが実情である。

これには人と機械とお金がいる。国は地方を援助して今回「日本を美しくする会」がとったような日本中の《被災地のために何かしたい》と思う人を糾合し、無料で現地まで送迎するシステムを作り、早く震災の後始末を終了して復興の緒に就いてもらいたいと切に思います。

私自身は目的がもう一つありました。被災地にあつて多く人を呑み込んで、いまだ多数の人が帰ることのない大海に向かって「鎮魂の笛」を吹くことでした。これは残念ながら適当な場所がなく叶いませんでしたが、帰途70余名の生徒先生が波の藻屑と消えた大川小学校に立ちよつていただいた。まだあどけない子供たちが波にさらわれる様を想像するだに身震いのする荒涼とした跡地に、ただ申し訳程度にひっそりとたたずむ祭壇に42名の仲間と手を合わせ、寂かに「御霊安かれ」と念じつつ鎮魂の笛を吹かせていただきました。

いつも果敢に物事に取り組む大谷先生はじめ便教会の先生方、そしてしっかりと後押しを惜し

まない鍵山秀三郎相談役はじめ「日本を美しくする会」の皆様感謝の念で一杯です。ありがとうございます。

★滋賀県40代 男性★

先日は、お世話になりました。このような会に参加させて頂くのは、教職に携わる者としては、最高にありがたい学びの場だと感じています。日本を美しくする会の皆様の御配慮に敬意を表し、まず感謝の気持ちを述べたいと思います。

今回のボランティアで感じたことはいくつかあります。

一つ目は、避難所のお世話係の浅野さんが「此一週間は忙しかったのよ」と、着くやいなや我々の顔を見て涙ぐまれていたことです。政府の方針から八月いっぱい全国の社協を中心とするボランティアが打ち切られたため九月以降手が足りていなかったそうです。想像するに、八月まではどこの避難所でもたくさんのボランティアで賑わっていただろうが、八月中に全避難民の仮設住宅を完成させるといふ方針の下、ボランティアも強制的に打ち切られた。しかし、実際は仮設住宅が全避難民を収容することができず、東日本全体で一割弱の避難民は残ることになった。こ

こ鹿妻小学校の避難所は数十名ほどを残すこととなり、人数は減ったといえど急にボランティアがいなくなつたため、浅野さんたちは取り残された思いを抱いていたのではないかと感じました。

私がクラスの生徒を把握する上で、これまではほとんどの生徒が出来たことについては「みんな大丈夫やな」と、残された一割弱の生徒に対する配慮が足りていないことに気がつきました。おそらく、私がある一割弱の生徒であれば「先生に無視されている」というように感じるのではないかと思います。今回の浅野さんの涙を見て、そのような立場に立たされた者の気持ちを感じるとる大切さを学ばせていただきました。

二つ目は、避難所に取り残された方は、大半がお年寄りや体の不自由な方が多いのではないかと感じました。おそらく、神戸と違って地方都市ですから普段から町の構成員も年配者が中心だと想像しますが、そうなると阪神淡路大震災の時もそうであったように、仮設住宅に移ってから心配だと感じました。それぞれが日常の生活を取り戻そうと必死になる大切な時期が仮設住宅の時期だと思いますが、阪神淡路大震災の時はその陰で多くの老人の孤独死がありました。若者のように将来の生活に必死になるわけではなく、身寄りもなく、それならこのままひっそりというように、気がついたら仮設住宅で孤独死を遂げていた

ということが多くありました。今回の被災地は阪神淡路大震災の時よりも高齢率が高いので、仮設住宅に移ってからはお年寄りとのコミュニケーションを取るシステムを構築することが大切だと感じました。

そのために我々が出来ることとして、避難所のお年寄りの方が子供や多くの方がよせる手紙を喜んでおられたことがヒントになると思います。避難所へ引越していくこれからも、そういった手紙を届け、返事を書いてもらうのが良いのではないのでしょうか。孤独死は心のストローク不足がその原因だと思います。震災から時期が経てば経つほど、被災地以外のほとんどの方の意識が薄れていきます。被災された方の中でも身寄りの無い人からすると、これまでは多くの方に励まされていたという意識があるでしょうが、時期が経てば多くの人の関心が自分には向いてこなくなります。そして、心の栄養不足から「将来に希望も持たず、仮設住宅も追い出されるなら、このまま死んだ方がましではないか」と考え孤独死を選ぶのではないかと感じたからです。

当日の河北新報の見出しに「9割超が仮設住宅へ」とありました。これからの支援を考えると、被災地での遺品の整理と仮設住宅での心のケアが大切だと感じました。

★★大阪府30代 男性★★

第三回被災地に学ぶ会に参加させて頂き本当にどうもありがとうございます。今回も多くのことを学ばせて頂きました。

前回、前々回に続き今回が三回目の参加でした。初めて参加したときは何か自分が大きく変わるのではないかという気持ちや特別な力が発揮できるのではないかといった期待などがありましたが、一回目、二回目と参加させて頂くなかで自分はどこに行ったとしても自分なただということがよくわかりました。大切なことは一日一日を大切に過ごし、日々の生活の中で如何に自分を磨いていくかであると思いました。そういう思いの中で今回参加をさせて頂きました。なので少し心苦しい感じがしていました。一回目、二回目は自分が自分の思い以上に貢献できるのではないかという夢を見ることができましたが、今回は、そういう甘い夢は見れませんでした。今の自分できないことはできないだろうし、自分の思い以上のことはできないだろうと感じていました。特別な技もない、思いの深さもまだまだな自分に行うことは本当に微々たるものだと感じていました。

行きのバスの自己紹介の中で参加された方々の思いをきかせて頂いたとき改めて色々な思いを持ってそれぞれの方が参加されていることを

知ることができました。また、途中のトイレ休憩では空を見上げると星がとても多くて近くてきれいでした。星がこんなにきれいなことを自分はすっかり忘れていました。

鹿妻小学校前で避難所チームと牡鹿半島チームにわかれしました。鹿妻小学校では浅野さんが避難所チームを迎えてくれました。浅野さんは目に涙を溜めておられて、浅野さんの思いの深さ、人としての暖かさを感じました。

午前中は、段ボールの家具作りを行いました。私は、段ボールをカットする作業を行いました。段ボールの想像以上の固さに苦労しました。丁寧に削っているつもりでも妙な焦りや疲れなどで雑になってしまうことがありました。その度に大谷先生の言葉が思い出され丁寧な作業を心がけることができました。出来上がっている家具を見たときはチームで協力することの大切さや参加されている方々の力強さを改めて感じる事ができました。

段ボールのカットをしているときに小学生の女の子が近くに遊びに来てくれました。段ボールをカットすることも少し手伝ってくれました。そういう中で女の子が父親がこの世にいないこと、いなくてよかったと思っているといったことを私に話しかけてくれました。また、好きな言葉を書くと行って段ボールに死亡と書いたりしてい

ました。私は女の子の行動に対して全く何もできませんでした。ただただ無力で女の子の心を少しも救うことができませんでした。人として、教育にかかわる者として、こういう時にどういう応答ができるかが大切だと思っていました。何もできませんでした。自分が人として相当未熟であることや生き方が半端であることを女の子によって教えられ気づかせてもらえました。

午後からは家具作り、トイレ掃除、体育館の裏の落ち葉掃除、中庭掃除に行きました。私は体育館の裏の落ち葉掃除を行いました。体育館の裏の掃除をしているとき最年少参加の中学生は色々なものに興味を示していました。若い人の感性の豊かさに驚くとともに知らないうちに心が固くなってしまうている自分に気づかされました。また、排水溝の水溜りに溜まっている落ち葉を一人素手で取り出されていた水谷先生の姿勢など見習わなければと思いました。

帰りには大川小学校に寄りました。その場で亡くなった方の無念の気持ちや残された方の悲しみの気持ちを思うと厳肅な気持ちになりました。生かされている者として生かされている間はしっかりと生きなければと思いました。

帰りのバスの中では一人一人が今回の活動の感想を述べていきました。それぞれの感想を聴かせて頂いてそこから多くのことを学ばせて頂

きました。行動を共にし、同じ思いを共有するからこそそれぞれ方の話が心に染み入るのだと思いました。「無力であるが無力でない」「思いを重ねることが大切」「協力するから頑張れる」「お客さん気分の自分に気づかされた」「有名人でもない僕のことを覚えてくれていたことが本当にうれしい」「○○さんのために頑張れる」「最後が大切」「一つ一つが自分の中にはまっていく感覚」「ミジンコやな」といった言葉が印象に残りました。

今回参加させて頂くことで、自分にできることは本当に微力だけれども被災地から学ばせて頂けることは本当に沢山あると感じさせて頂きました。そしてその学びによって人として少しずつですが成長させてもらっているような気がしています。本当に貴重な学びの場をどうもありがとうございました。

★★三重県30代 男性★★

まず、今回も学びの場を与えてくださった、日本を美しくする会の皆様、大谷先生に感謝いたします。そして、安心安全に現地まで送迎していただいた神姫バスの運転手様、ともに活動した同志のみなさん、ありがとうございます。

私は、今回で被災地に学ぶ会への参加が三回目

となりました。前回は、避難所に一泊したので、避難所で生活されている方々と会話をすることのできる時間が多くありました。しかし、私は自分から話かけに行くことができませんでした。ですので、今回は、隙間時間を見つけて、積極的に話しかけに行こうと決めていました。そして、学級の子どもたちから預かった手紙をお渡しするという役目もあつたので、何があっても、話しかける必要がありました。

ですが、やはり避難所のみなさんに「失礼なことを言ってしまったのだろうか。」「悲しいことを思い出させてしまわないだろうか。」と、不安になり、なかなか歩み寄せませんでした。そうしているうちに、同志のみなさんが次々に話しかけに行かれ、どなたも話中になってしまい、話しかけに行くことができませんでした。その後も、作業の合間に話しかける機会をうかがっていました。そして、ようやく一人の男性に話しを聞くことができました。すると、男性は、たくさん話をしてくださいました。それから自信が始め、数人に話しかけることができ、手紙もすべて渡すことができました。

お話を聞かせていただいた中には、「今まで、たくさんの人に話しかけてもらって、若返った。」や「手紙をもらおうとうれしい。返事を書く用事もできてうれしい。」という声がありました。です



ので、これからも機会があれば、もっと積極的に話しかけに行き、たくさん話を聞かせていただこうと思いました。

私の今回の作業は、午前中は、避難所のパティシオンのダンボールの再利用、午後は校舎周りの草ぬきでした。どちらも、大谷先生の助言通り、丁寧に作業をすることを心がけて取り組みました。また、第二回の学ぶ会で出会った子どもたちにも再会し、交流することができたことも良かったと思います。

そして、ありがたいことは、一緒に学ぶ会に参加されたみなさんの後ろ姿、行動を見ることができたことです。さらに、現地までの行きの車中では、みなさんの復興支援への熱い思いを聞くことができ、帰りの車中では、みなさんの学びをシェアしていただけことがとてもありがたかったです。そういった志の高いみなさんと長時間、同じ空間にいられるだけでも、知らず知らずに成長させていただいているのだろうと感じています。今回も、本当に学びの多い、とてもありがたい時間を過ごさせていただきました。これからも続けて、被災地の支援に力を注ぎ、お役に立ち、学んでいこうと思います。ありがとうございました。

★大阪府50代 男性★

日本を美しくする会のご厚意と大谷先生の御尽力によりまして、九月十日宮城県石巻市にて中学生の娘とともに活動させていただく機会をいただきました。ありがとうございました。

自分自身は八月三日から一度訪れておりましたが、避難所を訪れたのは初めてでした。少しの時間でしたので皆さんとお話する機会はありませんでしたが、雰囲気は少しは肌で感じられたかなと思います。自分は残念ながら多くのことを感じることは出来ませんでした。避難生活が六ヶ月になっっていることと、ことあるごとに言われる「がんばろう」という言葉や「頑張れ」となんでもかんでも声をかける事にさえ：おおいに考えさせられました。半年です、体育館での避難生活が・想像出来ません。自分は高校に勤務しておりますが、家庭環境の厳しい生徒も多いので声の掛け方一つについても考えていかなければと想っています。

帰路大川小学校を訪問する機会を頂きました。言葉で言い表せることはなにもありませんが、同行された久井さんが慰霊碑の前で鎮魂の笛を吹いてくださいました。その時に備えてあった風車が廻って驚いたとか何とも言えない気持ちになったのですが、それと同時に「鎮魂」という意味、横笛、など我々の祖先が大切にされて来た風

習・慣習についても今回学ばせていただきました。

前回訪れた八月三日は翌日ボランティアセンターの依頼で水害のあった福島県の金山町で活動させていただきましたが、津波と同様水害の被害は甚大です。被害にあった地域は山間部で高齢者が多く、多くの人出を必要としていました。一軒一軒瓦礫の除去が大変でしたが、みんなが力を合わせていたことがとても印象的でした。非常時には我々日本人には強い絆が発揮されることも体験出来ました。今回も南近畿で台風の被害がありました。今回も南近畿でももちろん大雨による被害ですが、上流にあるダムの放流が原因とも言われています。ダムの場合は水力発電が関係してありますので原発事故による電力確保のためにためられていた水を放流した結果、福島県金山町も南近畿も水害にあつたとも言われており、原発の事故と無関係ではないようです。

自分は今回特に学ばせていただいたことは、なんでもかんでも「がんばれ」ではないということ、我々の祖先が築いた風習・慣習を受け継ぐこと、自然に対してもっと「畏敬の念」を持つて大切にしていこうということ、現実・真実は自分の眼で確かめるといふことです。

最後になりますが娘と参加というわがままを寛大に許可いただいたことに感謝申し上げます。私たち親子にとりまして最良の一日になりました。

た。日本を美しくする会の皆様、今回参加して温かく私どもに接してくれた皆さんありがとうございますございました。

★★三重県40代 男性★★

日本を美しくする会のご支援によって、微力ながら、被災地に学ぶ機会をさせていただきながら、被災地に学ぶ機会をいただいていることに心から感謝致します。また、お世話をいただいている大谷先生、大木先生のきめ細やかなご配慮とご準備に対して敬意を表します。ありがとうございます。そして、今回一緒にさせていただいた志高い皆さんと共に活動できたことが大変嬉しく思いました。今回「被災地に学ぶ会」に参加させていただき、たくさんの学びを得ました。ご報告させていただきます。

私の担当は、牡鹿半島鮫島地区での瓦礫の分別作業でした。水田だったところが、津波によって運ばれた砂で埋まり、そこに瓦礫が散乱している状態でした。しかも瓦礫はいろんなものと絡み合っていて砂に埋もれていました。最近早朝トレーニングをしていたので、「よっしゃ」と勇んで、東京ドームくらいの広大なこの水田に足を踏み入れました。ところが、一人では何一つ埋まっている瓦礫を拾うことができません。三重から一緒に参

加した2人も同じで、目を合わせては苦笑いし、互いに協力し合うことにしました。それでなんとか3つほどの瓦礫を拾うことはできましたが、何か無力感を感じてしまい、どっと疲れました。しかし、昼からは違いました。リーダーの大木先生が、私たち28人が作業する場所を指定してくれました。私たち28人には、「この場所だけは綺麗にして帰りたい」という目標ができました。そして自然に、砂に埋まって絡み合っている大変な瓦礫には、ひとりふたり三人と自然に集まりだします。掛け声を掛け合い、時には励まし合い、焦らず、諦めずにその瓦礫と向き合うのです。そんな光景があらこちらで見られるようになり、そして、一つの瓦礫を砂から取り出せたときは、歓喜のガッツポーズまでとびだし、周りからは拍手が起りました。午前中のような無力感はありません。

今回、どんなに単調で、辛いことでも、そこにいる者同士が、同じ目標を共有し、お互いに思いやり、声を掛け合って雰囲気をつくり、支え合い助け合う心を持つと楽しくなることを経験しました。逆に、楽しいことでも、そこにいる者同士の関係がぎくしゃくしていたり、お互いを思いやる気持ちになかったりしたら、楽しいことではなくなつた経験を思い出しました。この二つの経験を通して改めて思うことは、「楽しいことではない、

あるのは、楽しい時間」ということです。そして、相手の想いに立ったり、想いを重ねたり、想いを馳せたりするということは、めぐりめぐって、自分を幸せにしているということに気付かせていただきました。

作業が終了し、避難所の鹿妻小学校に向かいました。避難所チームと合流して、避難所のリーダーである浅野さんからお言葉をいただきました。「こうやって手伝っていただくことで、私たちは一歩前に進むことができます。ありがとうございます。作業が一歩進むというのでなく、それもちろんなあるとは思いますが、私は、「心が前を向き一歩前進する」ということだろうと感じました。浅野さんが、バスに乗り込む私たち一人ひとりの顔を見て、微笑みながらお礼を言いながら握手されているのを少し離れたところで見させていただきました。心が洗われたのか、涙が出てきました。最後の最後まで、丁寧な心を尽くされる姿勢。私に欠けているところです。

その後、全員で大川小学校に行きました。鎮魂の笛を聴きながら、手を合わせて祈り、そして、子どもたちの無念の死とどう向き合っていけばいいのか考えました。私は、『思いを重ねたい』と思います。これからたくさんの夢を持って挑戦したかったこと、いっぱい親孝行をしたかったこと、友だちといっぱい楽しく遊びたかったこと、

そんな無念さを私の無念さにして、今、私が居る場所で、精一杯それを共有できる人を増やし、そして、つながっていきます。

★★広島県20代 男性★★

二〇一一年三月十一日午後2時46分、東日本大震災発生。あれから半年。第一回被災地に学ぶ会に参加して以来、二回目の参加となりました。実際に被災地に足を運ばせていただいたことで感じたことがたくさんあり、さらに多くのことを知って、学んで、伝えていきたいと思いました。まず、このような場をつくっていただいた「日本を美しくする会」の方々、「大阪便教会」の大谷育弘先生にお礼申し上げます。また、兵庫県の尼崎市から遠く宮城県石巻市まで運転してくださいましたバスの運転手の方々、一緒に被災地に行き学びを共有した参加者のみなさんに感謝します。ありがとうございました。

七月十日(土)に東日本大震災で被災した方々が避難されている宮城県の石巻市立鹿妻小学校に行きました。避難所に行くのは初めてで、震災から半年たった今でもたくさんの方々が体育館で生活をされています。そこでの活動を通して、二つの大きな学びをしました。

一つ目は、「何事にも真剣に取り組む。」という

ことです。避難所で生活する上で必要だった間仕切り用の段ボールを使って仮設住宅等でも使える家具を作らせていただきました。その段ボールは、とても厚く固いものでした。カッター等を使って、段ボールを切る、くり抜く、はめる、組み立てるという作業工程でした。私は、ひたすら段ボールを切るという「作業」をしていたので途中で手が痛くなりました。「少し疲れたな。」と思っていたとき、ふと顔をあげると周りの参加者の方々は、もくもくと自分の役割をこなしておられました。一つひとつついでいねいに作ろうと心がけ、一生懸命活動されていました。自分自身の心の弱さが恥ずかしくなりました。しかも、さらに使いやすいくなるためにはと考えて、いろいろな工夫もしておられました。一生懸命取り組み、そのなかで創意工夫することの大切さを学びました。

二つ目は、「強く生きる。」ということ。小学校で避難生活を送っている男の子と一緒にサッカーをして遊びました。体育館に戻り、「地震のこと思い出したりする。」と聞くと、「ぼく、津波に流されて、窓ガラスを割って屋根に上って助かったんだ。」と話してくれました。私は、それ以上何も聞けず、ただ「よく生きとったな。ありがとう。」としか言えませんでした。また、あるおじいさんは、津波から逃げるために高台へ行き、そのまま小学校に避難してきたそうです。自分の

家を見に帰ったのは、一週間後で想像以上の津波が押し寄せ、自宅は全壊していたとのことでした。「津波に流されて亡くなっていたほうが楽だったんじゃないのか。」と思った日もあったそうです。しかし、「生きていたら、何かうれしいことや楽しいことがある。」と思い、今は「生きてるだけで丸もうけ！」と考えていると話してくださいました。「その状況になってみないと分からないよね。」とも話されていました。

被災された方の心は本当に強いなと思いました。時には折れそうになる心を周りの方々が支え合うことでさらに強く生きていました。私自身もこれから自分の命を懸命に生きて、被災地に生きる方々のことを思い、祈りを届けていきたいと思いました。

九月十二日(月)地震から約半年、子どもたちと今回の大震災についての話をしました。2ヶ月目、4ヶ月目のとき以来、三回目の学習でした。私が被災地に行つて、見たこと、聞いたこと、感じたことを話しました。子どもたちにも、さらにいろいろな思いが加わったようでした。第四回被災地に学ぶ会にも参加させていただくことになっています。これからも被災地を訪れ、その現状を子どもたちに伝え続け、それからまた多くの人たちへ伝えていけたらよいと思います。ありがとうございました。

★★兵庫県30代 女性★★

第三回被災地に学ぶ会に参加させていただき、ありがとうございます。

改めまして、この度の東日本大震災の被災者の皆様に謹んでお見舞い申し上げますとともに、一日も早い復興を心よりお祈り申し上げます。

私は、一九九五年の阪神淡路大震災の四月に、学生として神戸に引越し、それから七年間、街が復興していく姿とともに、学生生活を送ってきました。

ビルや住宅が次々と建設され、着々と復興していくように見える神戸の街並み。その一方で、仮設住宅での孤独死、それまでの近所づきあいの希薄化、心のケアが十分でないことなど、人々の内面に関する復興に関しては、これからも様々な取り組みが必要とされています。

阪神大震災が復興していく過程での様々な経験から学び、東日本大震災の復興が、少しでも早く進みますようにと願いながら、今回の会に参加させていただきました。

今回、牡鹿半島の鮫浦で遺留品整理をさせていただきましたが、被災状況は、私の想像を遥かに絶するものでした。私は声を出すこともできず、その光景をただ見つめることしかできませんでした。

鮫浦は海に面した水田地帯でしたが、その面影

は微塵も残しておらず、津波によって海面下から押し上げられた膨大な量の砂に、鉄・木・コンクリートや漁具が、多数混在している状態でした。この地を愛し、農業や漁業を営んで来られた方々の無念さが、辺りを取り巻いているように感じました。

砂に埋まっている大きな鉄柱を手作業で掘り出していると、スコップ一つさえ満足に扱えない自分が情けなくなってきました。そして周りの方々との共同作業では、自分の心遣いの至らなさを痛感し、悲しくさえなってきました。しかし、被災された方々や破壊された自然のことを思うと、「他に誰がやるんだ。私がやるんだ!」という気持ち、心の底から込み上げてきました。そしてその瞬間、「私の力は微力ではあるけれども決して無力ではない。少しでもいいから、自分にできることを探して前に進もう」と決心をしました。

午後からは、自分の体力のことも考えて、海鞘貝の棚に吊り下げる貝殻の束を作る作業をしました。当日の朝に、大谷さんがおっしゃっていた今回の学ぶ会のテーマを思い出しました。それは「丁寧な作業をすること」でした。そのことを心で唱えながら、より大きな貝殻を選別して作業を進めていきました。そうしているうちに、自分自身は、このような穏やかな心持で、丁寧に人に接

しているだろうか、さらに、自分自身のこともおろそかにしていないだろうか、と疑問が湧いてきました。その疑問の答えは、私は、忙しさや余裕の無さを理由にして、周りの人だけでなく、私自身にも丁寧に向き合っただけでなく、私自身に合ったことなかつたということでした。

自分自身には微力があるということ、これからは丁寧に自他に向き合うことが重要であること。これら二つの気づきを与えてくださった今回の会に参加させていただいたことを、心より感謝いたします。

そして、大川小学校の訪問では、小学校で起こった出来事の悲しみが受け止めきれず、学校前に立っていた時間、ずっと涙が堪えきれませんでした。震災は、大川小学校の時を止めてしまったのだ、とさえ思えました。教師として、生徒の命と生活を守りきることの重さを考えさせられました。遅い夕刻に訪れた大川小学校の姿は、私の心の奥深くに刻みこまれました。

最後になりましたが、「被災地という場をお借りして、人としての生き方を学ぶ会」に参加させていただき、ありがとうございました。この会を紹介してくださった岡本武司先生にも心から感謝いたします。

★★大阪府20代 男性★★

第三回被災地に学ぶ会に参加させていただき、ありがとうございます。今回の学ぶ会も、多くの学び、感謝の気持ちでいっぱいでした。本当にありがとうございます。

今回の被災地に学ぶ会では、第二回の被災地に学ぶ会に参加させていただいた時に、とても多くのこと、大切なことを学ばしていただいた、避難所のリーダーの浅野さんに再びお会いすることができました。

浅野さんはお会いした時、少し疲れた表情で、私たちを見ると涙を流されました。私の中には、明るくて元気な浅野さんの印象が強かったため、正直驚いてしまいました。また、浅野さんの腕は太く筋肉質になっていました。毎日何度も食事を運び、重い荷物を運び、苦勞されているのがその腕には表れているようでした。

私は今回特別な出会いがありました。それは、前回鹿妻小学校に来させていただいた時に、お話を聞かせていただいたおばあさんとの再会です。私はおばあさんに、覚えていいますかと話しかけました。するとおばあさんは、嬉しそうに笑みを返してくださいました。そして、涙を流しながら、「来てくれてありがとう。本当に嬉しい。」と何度も何度もおっしゃってくれました。また、「前回来てくれたときに、もう会えないと思って、バ

スが見えなくなるまでずっと手を振っていたんだよ。だから今日会えて本当に嬉しい。」さらには、「仮設住宅が当たらなくて、まだここに居たから、また会えることができた。神様に感謝。」とまでおっしゃってくださいました。私は嬉しくて、言葉にすることができずに、一緒に涙を流していました。

私は、誰かの役に立とうとかそういう気持ちではなく、学ばしていただくという気持ちで参加させていただきました。しかし、おばあさんにお会いして、こんな私でも誰かに喜んでもらえるのだと感じた自分がいました。そして、人から感謝されるのが、こんなにも嬉しいことだと初めて知りました。私はこれからのいろんなことに感謝しようと思います。おばあさん本当にありがとうございます。

今回も被災地から多くの学びがありました。何よりも、一度だけではなく何度も行かせていただくことの大切さを学びました。また、ぜひ参加させていたいただきたいです。

最後になりましたが、大谷先生をはじめ、多くの方の協力により、このような貴重な経験をすることができ、多くの学びを与えて頂いたことに深く感謝したいと思います。ありがとうございます。